

## 大名行列

県下に「都留の八朔祭」として有名にしてきたものは、何といっても付祭りとして出される大名行列があるからでしょう。

大名行列を祭りの風流ふうりゅうとしている例は他でもみられます。加賀の百万石祭り、格式十五万石の箱根の大名行列、十万石の三条市大名行列などは全国的にも有名なものですが、県内では大正末まで行なわれた上暮地の百万石大名行列、中道往還にあたる本栖の奴ぶりと称する大名行列、谷村をまねたという精進の大名行列などをあげることができます。

これらの中で、歴史の古さと由緒を比較して、谷村の八朔祭はその最たるものだといえるでしょう。

神楽や屋台とともに神輿の先導として繰りひろげられた大名行列は、延々数丁にも及んだといわれます。その行列には「郡内の人々が全部集ったかと思わせるほどの賑わいぶりで沿道は人々で埋めつくされたと言えられています。

以下、城下町を一段といろどり、江戸の時代絵巻を繰りひろげた八朔祭りのあらましを、幸い古文書として残されている「生出明神御祭礼定式」によって大名行列を中心に記してみましょう。

「今年是本祭りで大名行列が出される」ということになると、子供連や若い衆はこの祭りの日を待ちつづけ、一ヶ月ほど前から心はずませてその準備や練習に余念がありません。一年間のうっせきしたものが、祭りに参加することでことごとく発散されてしまう。祭りには不思議な力があります。この祭りに様々な思いをこめて備えたのです。

9月1日、真夜中の午前1時、一番太鼓の音が鳴り響くと祭りを待ちつづけた若者達は興奮し寝つかれなかったといえます。

三番太鼓と共にふれる「御支度——御支度——」の合図で寄り集まり、支度を整えて生出神社に下り、祭式が執り行なわれ、神輿への御霊移し、御神酒びらき、四日市場連中の神楽の奉納、笛と太鼓に勢づいた獅子が所せましと舞って静から動の世界へと誘います。やがて式もとどころりなく終って御旅所への神輿の巡幸ははじまります。

先頭に神太鼓の触れが行列の巡行を知らせる。鉄砲合図に大名行列のおたち。十万石の格式を華麗に、また勇壮に「下に——、下に——」と先陣の号令が威厳を示す。神迎えであることと、お殿様のお通りであるから、行列を高いところから迎えることは許されません。直ちに戒められてしまうのです。そればかりではありません。軒から突き出たようなものがあって行列の巡幸にさしさわるようなものがあると切り落されてしまうのです。



昔時の大名行列（大正10年）

袴姿に陣笠、陣羽織に身を固めた御目付役や役人は威儀を正して整然と進みます。参勤交代でかつて大名たちが演じたように、そこには天下にその威を誇り、権力を示した雄姿があります。その威厳とは対象的に、ひょうひょうとして踊るユーモラスな奴さんの仕草がまた何ともいえません。

大名行列のあとには早馬町の屋台が曳かれます。紅白の曳綱をとり、揃いの祭りゆかたの若衆や子供連がかけ声勇ましく屋台を運びます。屋台の上では、腕に覚えのある連中が祭り囃子に調子を合せての熱演です。屋台をいろいろ飾幕、水引幕、中幕、泥幕、それらは江戸時代一流の浮世絵師の筆によるもの、まさに豪華絢爛たるものです。

続いて新町の屋台が曳がれてきます。各町の幡がつづきます。幡は各町のしるし、町々からの代表者とともに神輿の警護の役割を担っています。新町の屋台のうしろは新井の神楽獅子、笛と太鼓のリズムによって軽妙に舞います。そのあとを二台の屋台が競い合って続きます。中町と下町です。また神楽獅子が舞いながら通ります。宮本四日市場です。さすが宮本、笛の吹き手も、舞い手も多勢です。神楽堂をとり囲んで獅子のあとに一団となって通過します。花灯籠がそのあとについていきます。

いよいよ神輿の巡幸です。代官所の役人と足軽二人が神輿を供奉し、この祭りの支配者たちの総行司をはじめとする各町および四日市場の世話役

が付き従っています。若衆にかつがれた神輿は烏帽子をかぶり白張の装束に身を包んだ舎人に供奉されて、並居る氏子たちの崇敬を集めて荘重に進む。しんがりには司祭者神主が馬上にまたがり、神事を執行する主宰者としての貫禄を示しながら延々と続いた祭りの巡行を締めくくる。

以上が行列のあらましです。後世になって田町からは船形屋台が、横町からは重層屋台が繰り出されたといわれています。また仮装行列、花車、踊りなど趣向をこらした「にわか」ものを出して、祭りの景気を競い合い、盛りあげたことも伝えられています。

この大名行列や屋台曳きの付祭りはいつ頃からはじめられたものでしょう。これを明らかにできるのは古文書しかありませんが、いまのところ、天保年間（1830—40）のものが一番古く、これによると「往古より供奉順行」と記されているので、それ以前にさかのぼることは確かです。

秋元谷村藩主が川越へ転封になったのが宝永元（1704）年です。この時行列道具一式を下天神町に置みやげとして贈ったと伝えられ、また足軽が行列の仕様を教え込んだとも言われています。天領となり、武家屋敷がとり払われると賑わった城下町は急にさびれてしまったので、このことを嘆いた谷村の代表は代官所へ、谷村城跡の一隅に東照権現を祀り祭礼をして賑わいをとり戻そうと伺いをたてたことが享保13（1732）年の古文書に残されています。この文書で八朔祭りの賑わいはこのときはまだなかったことを想像させます。

こんな背景と、絹織物の生産および取引によって町が次第に栄え江戸文化にも触れて、祭りへの思いは次第に重なり、農民の素朴な農耕儀礼であった生田神社の祭礼は、文化文政の頃、経済力の伸展に伴って附祭りの規模が一段と大きなものとなり、あの豪華な飾り幕をしつらえた屋台や、大名行列を生み出していったものでしょう。

大名行列は下天神町の出番です。この町に嘉永年間（1848—54）の「行列達」という大名行列の仕様書が保存されています。行列の役割分担や人数を知ることができます。その役目を記してみましょう。

御馳走請 伊三郎、林右衛門（以下名前省略、（ ）内人数のみ記す）  
先目附（1）、先箱（2）、鎗大将（2）、赤熊（2）、達道具（1）、鎗目附（2）  
数鎗（10）、徒士目付（1）、御徒士（18）、中目付（2）、御鉄砲（10）、路目附（2）、御弓組（3）、御具足（6）、御鷹匠（2）、長刀（1）、馬口（2）、御小姓組（11）、御持弓（1）、御刀筒（1）、床机（1）、草履（1）、大笠（1）、立傘（1）、御手鎗（2）、御葛籠馬（2）、路箱（2）、沓籠（1）、賄方（2）、合羽籠（3）、路桿（1） 合計 33役 99名

大名行列というのは、徳川幕府が諸国の大名を統制するために、一定期間大名を江戸へ参府させ、江戸へ住まわせて、火の番や火消し、警固など

にあらせた制度で、江戸と領国との往き来を家柄や石高によった規模で道中した行列のことをいいます。

行列のお供には、家臣だけでなく、町人で身振り手振りのうまい者を奴さんとしてやとったといえます。それは見栄を張るものであったし、また大名の旅のつれづれを慰める役目もあって、衣裳も後姿のよさをこらしたものとされています。長い毛鎗を手ぎわよく投げ交わす仕草も見どころといえましょう。

十万石では馬上10騎、足軽80人、中間・人足が140人から150人、総勢230人から240人だといわれています。先にあげた下天神町の行列では総勢99人で、十万石に及びませんが、下天神町という小さい町でだせる勢一杯の人数で編成したもので、小規模は承知で十万石の格式と称しながら続けてきたものでしょう。

「ア、ヨイヤマカ、ヨイ、アー、ヨイッ、ヨイッ」と齒切れの良いかけ声で左に右にと足を揃えて行列は進みます。この行列の引立役として登場するものに道中唄があります。前と後で交わる交わるにうたえば、行列の足並みもまた揃い、道中の風情を更にもり立てたものです。

道中唄

- ㄱ めでためでたの若松様よ、枝も栄えて葉も茂る。
- ㄱ 咲いた桜にゃあー、なぜ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る。
- ㄱ 花が散ろうが遠くになるが、また来る春にはよい芽ふく。
- ㄱ 坂は照る照る鈴鹿はくもる、はぎの土山雨が降る。
- ㄱ 声がたたなきゃなんてん山のお水おあがり声があつ。
- ㄱ そろたそろたよ行列がそろた、わけて奴さんの程のよさ。

先の仕様で気付かれたと思いますが、現行と違って奴さんとか、殿とかお籠とかがありません。代官所などの制約などもあっていまの形になるまでにはいろいろなことがあったと思います。いまは実行委員会が組織されて毎年行列が出されていますが、こうした記録をとき折り振り返って伝統を生かしつつ上げたいものです。

棚本安男